
寝子 short version

紀ノ川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寝子 short version

【Nコード】

N2101N

【作者名】

紀ノ川

【あらすじ】

寝てばかりいるから猫になった。そんな僕の名前は寝子。

これは、和歌山北部の町から淡路島へ、海を泳いで渡ろうとして溺れて死んだ猫の話。

【目次】

- ・起・寝子の毎日
- ・承・寝子の青春
- ・転・寝子の引っ越し
- ・結・寝子の旅立ち

【本文】

- ・起・寝子の毎日

寝てばかりいるから猫になった。そんな僕の名前は寝子。

これは、和歌山北部の町から淡路島へ、海を泳いで渡ろうとして、溺れて死んだ猫の話。

寝子はウォーキングが好きだった。海岸沿いに新しくつくられた公園をウォーキングするのが好きだった。

これまで10年以上無職で、これから先10年以上も無職かと思うと、恥と不安と絶望で居ても立ってもいられなくなり、ウォーキングに出掛けた。ウォーキングをしている時だけが、恥と不安と絶望を忘れられる唯一つの時だった。

寝子の毎日はCDを聴きながら煙草を吸い、アイスコーヒーを飲むだけだった。

寝子はブルースが好きだった。

エリック・クラブトンからロバート・ジョンソンを知り、ザ・ローリング・ストーンズからマディ・ウォーターズを知り、デルタブルースやシカゴブルースのCDを聴き漁った。

つまり寝子は万年床で寝てばかりいた。しかし、寝子にも青春はあった。寝子にも立って働いていた頃があった。

・承・寝子の青春

寝子が社会人になった時、世の中はバブル景気に湧いていた。この会社も人手不足だった。寝子でさえ期待の新人として職場に歓迎された。寝子は真面目に一生懸命仕事をした。そして同僚のお嬢様猫と仲良くなった。職場の給湯室でよく話をした。しかし寝子にはお嬢様猫をデートに誘う勇氣は無かった。もし断られたら？と思うだけで震え上がった。

お嬢様猫はそんな根性無しの寝子に愛想を尽かして、何も告げずに去っていった。

その後寝子も会社を辞職した。

寝子は再就職もした。バブルははじけていたが、当時まだ寝子は若かった。だが再就職先の先輩猫から、嫌という程いじめられて、3ヶ月で辞めてしまった。

寝子は猫社会に溶け込めなかった。寝子の毎日は前述した通りだ。一度レールから外れるともう猫社会に戻れなかった。寝子は結婚や給料日に居酒屋でちよいと一杯！といった喜びを放棄しなければならなかった。寝子には世捨人・隠遁者・仙人としての悟りが求められた。

世の中では寝子と同じ境遇の猫達が自殺や犯罪を起こしていた。仕事に就いていても飲酒運転で身を滅ぼす猫も居た。寝子はそんな情報をインターネットでじっと見ていた。

・転・寝子の引つ越し

ある日突然寝子は和歌山北部の町から、東京に引つ越す事になった。年老いた親猫の事情だった。親猫の年金で生活する寝子には選択肢はなく、引つ越し作業は感傷に浸る時間も無い早さで実行された。正に「ある日突然」という表現がピッタリだった。

寝子は愛する公園でウォーキングを続けたかった。表向きは引つ越し作業に協力しながらも、寝子は引つ越すぐらいならウォーキングをしている最中に死んでしまいたいと思った。それはどんな死に方よりも幸福な死に方だと寝子には思われた。

寝子は実際に引つ越しの2日前の3月末の早朝に、わざと薄着をしていつもより遙かに多くの距離を、猛スピードでウォーキングしたが願いは叶えられなかった。死ねなかったのだ。海からの凍てつく様な強風の中で、心臓を太い針で刺された様な痛みが1度だけあった。ただそれだけだった。寝子はその事を思い返す度に「あれは俺が死ぬるたつた1度のチャンスだったんだな」と思った。そして「そのたつた1度のチャンスに俺は死ぬなかったんだな」と思った。

・結・寝子の旅立ち

引つ越しの前日、寝子は夜中の2時に公園に行き、公園沿いの砂浜に座り、煙草を吸い缶コーヒーを飲みながら、対岸にある淡路島を、じつと見つめていた。

寝子は淡路島に憧れていた。洲本という街には温泉が湧いていると聞いていた。寝子は年老いた親猫を洲本の高級旅館に連れて行く事を、日頃から夢見ていた。寝子がお金を全部出して、年老いた親猫を招待するのだ。みんな温泉に入り、大きな机一杯に並べられた夕飯の魚料理の数々に舌鼓を打つ。年老いた親猫が、感謝の言葉を口にすると、寝子は素知らぬ素振りでその言葉を受け流す。そして年老いた親猫が満足して布団の中でいびきを立てはじめると、寝

子は高級旅館の最上階にあるであろうバーで独りウイスキーの水割りを飲むのだ。

寝子は叶えられなかった夢を砂浜でじって見つめていた。そして缶コーヒーが空になると腰を上げて海の中へと入って行った。

足が着く所までは行けるだろうと思いい、しばらくは海の中を進んだが、波が顔まで押し寄せてくると寝子はもう溺れはじめた。足はまだ着くのに波が顔を覆うのだ。

砂浜からだとあれだけ穏やかに見えた海だったが、中に入ると嵐が来たのと思う程波が強い。まだ足は着くのに、着くのに、と思っているうちに口と鼻から大量の海水を飲み込み寝子は溺れ死んだ。

寝てばかりいるから猫になった。そんな僕の名前は寝子。

これは、和歌山北部の町から淡路島へ、海を泳いで渡ろうとして、溺れて死んだ猫の話。

(完 最終更新日11年02月12日)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2101n/>

寝子 short version

2011年10月7日10時31分発行